

福岡市西区今宿横浜

今山遺跡⁽¹⁾

—石斧製作の開始期と遺跡の現状について—

1968

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第22集



1973

福岡市教育委員会

福岡市西区今宿横浜

今山遺跡⁽¹⁾

—石斧製作の開始期と遺跡の現状について—

1968

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第22集

1973

福岡市教育委員会

目 次

1はじめに.....	1
2調査の経過.....	1
3発掘調査.....	4
調査	
出土遺物	
4分布調査.....	7
5おわりに.....	9

(執筆 下條信行)

例 言

- 1.本稿は1968年12月6日～8日にかけて行なった今山遺跡遺物包含残存調査と今山内の石斧出土地点確認調査の報告である。
- 2.調査は福岡市教育委員会社会教育課によって主催され、調査には下記の諸氏が参加し、下條がこれを統括した（所属は当時）。

九州大学考古学研究室 地元参加者	西健一郎 藤口健二 徳永博行 真野和夫 板屋猛 松本守三 松本金成 板屋辰雄 津田春雄 松本陽生
社会教育課	青木崇 清水義彦 石橋博
社会教育課嘱託	下條信行（調査主任） 柳田純孝 橋口達也
- 3.上述列記者以外にも、地元保存会の方々には宿舎、伐採などの援助を受け、九州大学考古学研究室には調査体制の確立に多大の迷惑をかけた。記して謝意を表す。
- 4.遺跡実測は上記調査参加者全員でこれにあたり、遺物については下條と福岡市教育委員会文化課の沢泉臣、横山邦維とで行なった。製図はそのほとんどを沢泉臣、一部を横山邦維が担当した。掲載写真はいづれも下條の撮影による。
- 5.本書の編集、執筆はすべて下條が行なった。

—今山石斧製作の開始期と遺跡の現状について—

1. はじめに

今山石斧製作遺跡が最初に学会に報告されたのは大正13年中山平次郎によってである。その重要性は弥生時代の石斧の製作過程を如実に追跡したことと、北部九州に今山製の石斧が分布していることから、古代における原始的な社会的分業生産の開始がすでに弥生時代の成る時期に始まっていたことを知りえた点にあった。それから今日まで、各地の遺跡で今山製石斧の出土例が増加し、今山製石斧の分布地図なども作製されるようになった。一方学界においても、社会考古学的研究がさかんになるに従い、古代社会における初期社会的分業の、言葉として適切ではないかといわばわが国の商工業の芽はえとそれにともなう私的所有の発生の解明に役立つ重要な遺跡として注視されてきた。しかし、他方遺跡の著名度が高まるに従い、各地の愛好家による石斧採集が間断なく行なわれたため、近年にいたっては、表面に散布する石斧はほとんどわれわれの目に触れることができない程に採集しつくされてしまい、地元の今山遺跡保存会や見識ある有識者をひどくなげかせる結果となった。

極度に近代化された機械力によってなされる宅地造成の波は追いうちをかけるように今山にも、はげしく押し寄せ、すでに今山の北半分は造成がおわってかっての景観をみるとはできない。それに加えて個人による宅地の建設などもなしくずして進み今山遺跡はその遺跡範囲を年々減少し、特に最終仕上げが行なわれたと考えられる今山南麓の製作工房推測地附近は、その存否を時間の問題としている。これに対応して、今山周辺の人々は遺跡の保存を計るべく遺跡保存会を結成して保存活動を展開しようとしている。昭和43年に地元の松本金藏氏と真増築の際に未製の玄武岩石斧を多量に出土したと、同保存会より当時の社会教育課文化係に連絡があったので筆者は事の重要性にかんがみ、その地点の点検、残存調査を行なうことを考慮に入れて現地に足を進んだ。その結果、当時、福岡市の西部地域の埋蔵文化財分布調査を福岡市で実施していたので、これの一環としてこの際今山の遺跡分布調査と当該石斧出土地の残存調査を行なうこととし、地元の援助、協力を乞うて昭和43年に、上記目的的調査を行なった。中山博士の報告以来、今山周辺の遺跡についても新知見が続出し、今宿全体の中での今山遺跡という考え方方が可能になってきつつある。それらを含めて本遺跡分布調査の成果も報告する予定であったが、事の緊急性にかんがみ、今回の調査結果のみを報告し保存のための資料として提供したい。従って本報告においては松本金藏氏宅裏の石斧出土地点の発掘調査結果と今山川内に残存する遺跡の踏査結果に限って報告したい。

2. 調査の経過

昭和43年10月7日に地元今宿字横浜の町主・話人松本守一氏より、同横浜の1601の13松本金藏

凡例

- 今山1~4遺跡
- 玄武岩石斧出土地
- 古墳



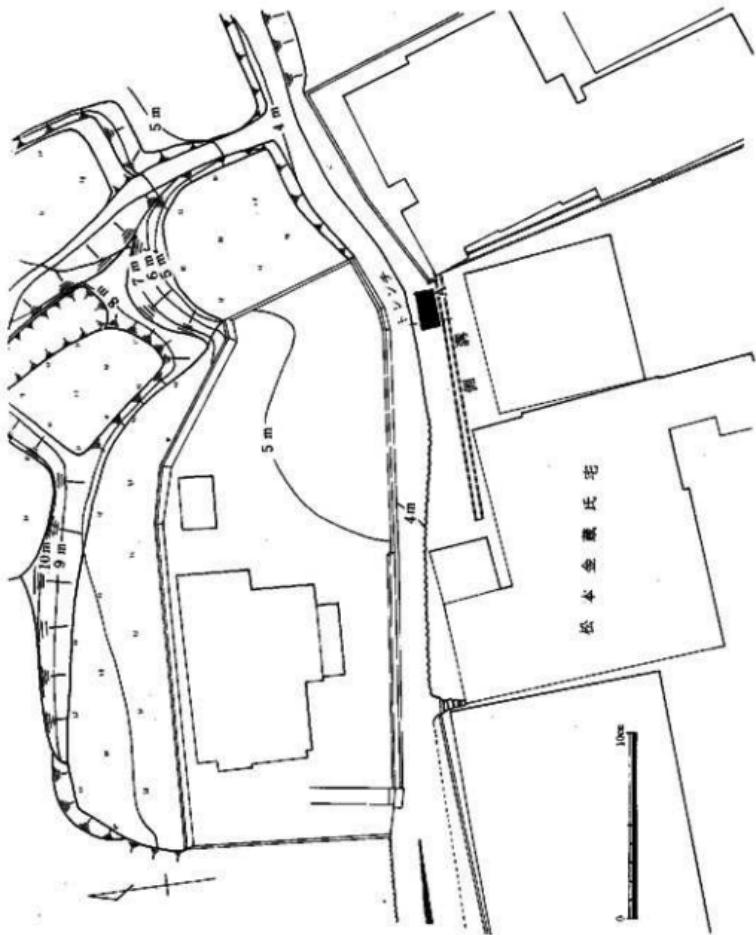
第1図 今山遺跡の地形と遺跡分布図

氏宅地内より、今山製の未製石斧が多量に出土し他に残余の遺物の包藏も予想されるので、何等かの手をうってほしいとの調査依頼が福岡市教育委員会に提出されたので筆者は同月18日に現地におもむき、出土の経過の聴取と遺物の調査を行なった。

それによれば下記のとおりである。昭和43年9月8日前後、上地所有者松本金蔵氏が自宅裏の増築を行ない、その後に側溝を施設すべく幅50cmの溝を掘り下げたところ

地下30~50cmの間から約1.5mにわたって50本位の木製石斧が出土したとのことである(第2図A地点)。遺物は原本かは持ちざられ発見当時よりも、かなり減少していたが、さいわい同氏宅に大部分が保管されていたので実見することができた。それによればほとんどのが、打製一敲

第2図 今山第4遺跡調査地点と地形図（A地点より多数の石斧を検出）



打段階の木製石斧で、くわしい分析は本稿ではふれないが、いづれも半折している。また後述するような遺跡の立地であることから考えて、この遺跡は失敗品の集積場ではないかと考えた。それと同時に出土した細片化した土器中に、弥生時代前期終末ごろと考えられる、いわゆる龜の甲式土器片が採集されていたので、本遺跡の年代は従来の知見（中期）よりやゝかかのぼる時期のものではないかと今後の調査に期待を抱かせた。こうして、この遺跡の出土遺物の年代決定、遺構の存否、遺物の残存状況と崩壊していく今山石斧製作所の現状を把握するために、同年12月6日～8日の3日間にわたって、前述諸氏の協力を得て調査を行なった。調査は①A地点遺跡の小発掘、②今山山中の石斧および露頭の分布調査、③重要箇所の半板測量の3点を

目的にして行なわれ、おのの下記のような成果を上げることができた。なお福岡市の埋蔵文化財遺跡地名表には中山博士によって報じられた熊野神社周辺を今山第1遺跡同じく山麓東南鉄道敷設の際の出土遺跡を第2遺跡、今回の発掘調査地点を第4遺跡、山頂新発見の露頭及びその周辺を第3遺跡と名称を付して掲載したので本稿においてもこれにならうこととした（第1図参照）。

3. 発掘調査（今山第4遺跡）

松本金藏氏宅地内遺物出上箇所（A地点）は福岡市大字今宿字横浜1601の7に相当する。

地形（第1・2・3図）

今山は博多湾の西岸にそびえる南北550m、東西300mの南北に長い標高82mの低い小丘陵で、その南半は玄武岩を主体とする岩塊によって構成される。その質は堅致で固い。

今山の山形はやはり同じく玄武岩を主要岩石とする北の混沙門山、博多湾中に浮かぶ残島さらに志摩町沿岸沿いに散在する姫島、立石山などと同じように、独立の小丘陵をなして腕を伏せたような状態にある。今日この周辺は北の今津溝河口を除いて、ほとんど水田化されているが、かつては今津～加布里に亘る糸島水道が開けて環海的自然環境が支配的であった。水田地帯は南の今宿青木方面に開け、からうじて砂嘴をもって陸繋されていた。

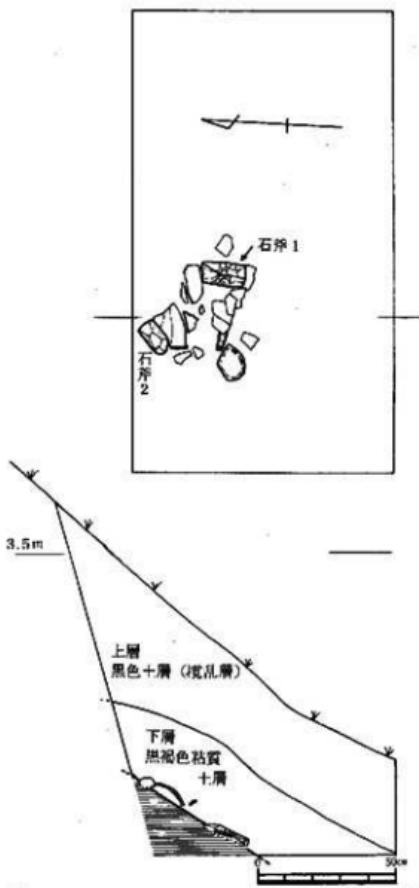
この今山の南山麓は標高5m前後で傾斜変換線となり、さらにその下方の3～2m前後の水田地につながっていくが、遺跡地はこの変換傾斜面に位置する。北からの急傾斜が標高8～4mで緩傾斜となり、更に4～3mで一階の傾斜をもつが、遺物はこの標高4～3m傾斜部およびその下端平坦部に包蔵されていると考えられる。今山の東麓沿いに今津方面に抜ける南北の県道があるが、遺跡はこれより、およそ50m西によった地点で、その南には人家が集中している。発見の契機となった前述の側溝は標高4～3m間の崖面の下端部に沿って東西につくられ、すでに工事は完了していた。南はすぐ人家につらなり調査困難な地域であるため調査地点は側溝の北側の比高1.5mの緩斜面に求めた。

調査

遺構および遺物の残存度の調査が目的であるために、発掘範囲は最小限にしぶり石斧の多量に出土した地点のすぐ北側の標高4～3m間の傾斜面に幅2m（東西）、奥行1m（南北）の小発掘地を設定した。

この発掘地の土層は地山を除いて二層に分離でき、上層は厚さ40～50cmの黒色の搅乱土層で南に漸次薄くなる。上面からの流土による二次堆積で層中には流れ込んだ黒煙石片、須恵器、土師器、弥生式土器（板付II式・須秩式）片や現代瓦片などが出土した。

下層は黒褐色の粘質土層で、上層と同じく北より南に傾斜している。厚さ25cm程度の遺物包



第3図 今山第4遺跡の遺物出土状態と断面図

出土遺物（第4・5・6図）

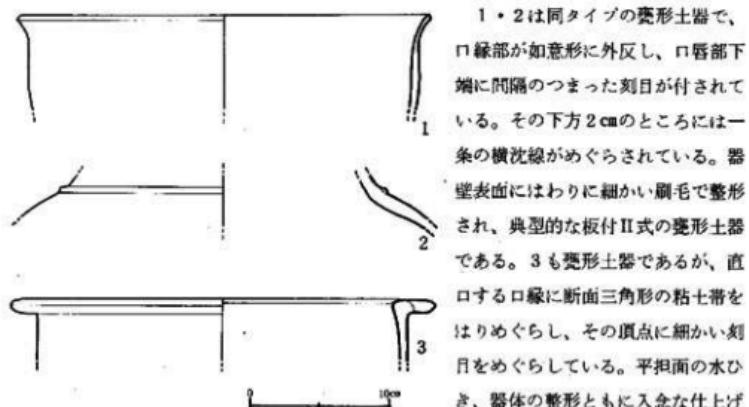
上層の土器（第4図）

上層の搅乱層の土器中弥生式土器には板付II式土器と須玖式土器がある。1は板付II式土器で口縁があまり外反しない古式の感じをうける變形土器。砂粒のない焼成良好の土器である。2は壺形土器の頸胴部の一部でその転換部に一条の山形凸帯を貼付している。頸が内傾する板付II式土器である。歓質、粗製。3は焼成良好で堅緻な仕上げの発達した須玖式變形土器である。

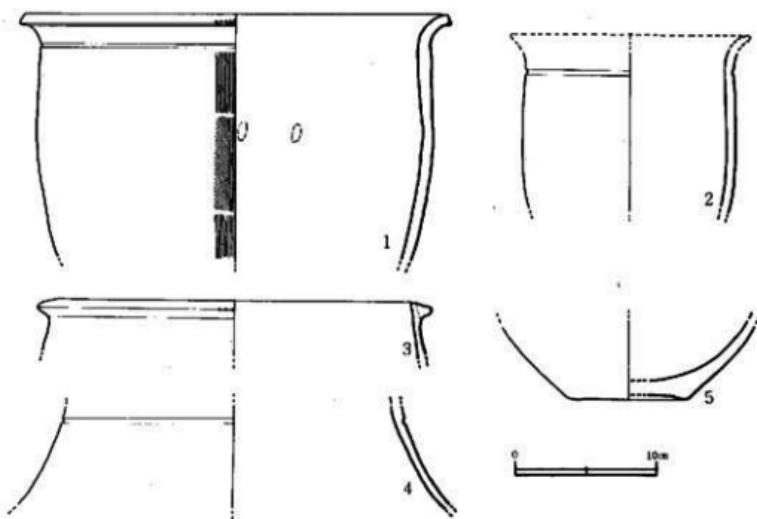
含層である。この層の表面には、土器片をわずかに含むが、他は一括して地山面に密着して出土する単純層である。この一括遺物には弥生式土器、未製玄武岩石斧（二点）、玄武岩塊、同石屑片があり、石斧製作に関連する層であることが判明した。弥生式土器には前期終末期の亀の甲タイプの土器を含み、壺形土器と壺形土器が出土している。玄武岩未製石斧の1は打裂段階の良品で、他は敲打のかなり進んだ段階の折損品である。

この共伴関係によって、今山玄武岩石斧の製作開始期が、弥生前期終末にさかのぼることが確認された。地山は褐色の粘質土でやはり上下層と同じように北より南に傾斜している。

下層の土器（第5・6図）



第4図 黒色土層（上層一搅乱層）出土土器実測図
1・2は同タイプの変形土器で、口縁部が如意形に外反し、口唇部下端に間隔のついた刻目が付されている。その下方2cmのところには一条の横沈線がめぐらされている。器壁表面にはわりに細かい刷毛で整形され、典型的な板付II式の変形土器である。3も変形土器であるが、直口する口縁に断面三角形の粘土帯をはりめぐらし、その頂点に細かい刻目をめぐらしている。平担面の水ひき、器体の整形ともに入念な仕上げをみせ焼成も堅緻で、中期板付III式土器への接近が強く感じられる黒色のいわゆる亀の甲式土器である。6図は亀の甲式土器の胴部で、巾広の浅い三角突帯が貼付され、凸帯の上部に細く縦長の刻目が付されている。4は変形上器の頸部で、その上方に一条の横沈線をめぐらし、起ち上がりの強い頸部を有す板付II式の変形土器である。明褐色をなし



第5図 黒褐色粘質土層（下層一遺物包含層）出土土器実測図



第6図 黒褐色粘質上層
(下層) 出土土器拓影

焼成良好である。5は壺形上器の底部で明褐色の焼成良好な土器である。底部はやゝ上げ底となっている。

これらの土器は、いづれも板付II式土器に含まれるものであるが、その中でも末期に位置づけられる。弥生時代前期終末期の土器といえる。

石斧（第7図1・2）

玄武岩石塊、石屑を除いて、木製石斧が二点出土している。いづれも玄武岩製で地山に接し、亀の甲式上器と共に作して出土した。弥生時代前期終末期の石斧である。

1は粗削段階を経て、小割を加えながら全体の器形、器面の調整が行なわれるいわゆる打製段階の木製石斧である。原石面をプラットホームとして擊打を加え、縦形の剥片を得、これに両側より打撃を与え、階段状の剥離によって全体の器形を整えている。さらに両側に調整を加え、細部加工を行なっている。加工、形態共に打製段階としてはほど完成に近いもので敲打に移行する直前のものである。長さ17.6、中央部幅9.0、厚さ5.7cmをはかる。

2は1より更に製作工程の進んだ敲打段階の木製石斧で頭部および刃部を大きく欠損している。器身にも剥離がはげしく、表裏両面共に大きな剥離痕を残している。残存部の器面は、全体的によく敲打が加えられ、打製段階に生じる縫は、はゞたゞきべりされている。敲打もかなり進んだ段階のものである。この段階での折損品は側溝よりの採集品中にも多く、敲打技術の困難性を感じさせられる。その失敗作として廃棄されたものであろう。長さ12、幅7.7、厚さ5cmをはかる。

4. 分布調査（第1図）

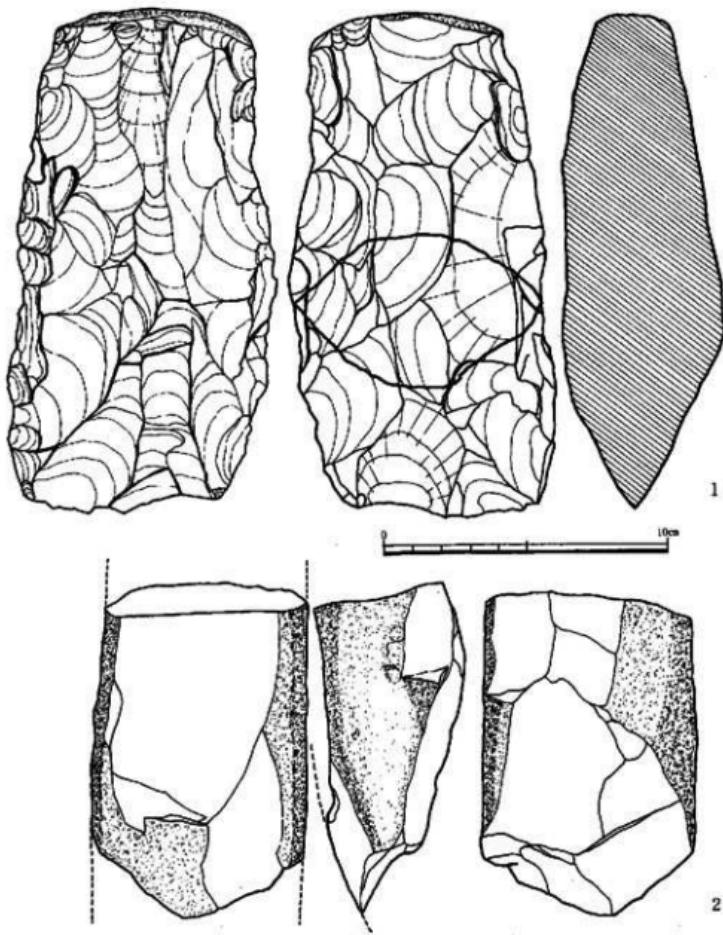
今まで報告書などに公けにされている今山内の遺跡地は中山平次郎氏によるものだけである。それによれば露頭および粗削段階の木製石斧が散布する標高57mの熊野神社附近の一帯（今山第一遺跡）と打製・敲打段階の未製石斧や弥生式中期上器を多量に出土して、今山石斧製作所址をいっそう世に認識させる契機となった今山東南麓隅の今山第二遺跡の二地点である。

調査は地元協力者によって指摘された石斧既採集地点を中心にわずか1日の間で行なわれた。そのため疎漏な面があるのは止むをえない。調査は大きく露頭部の調査と石斧出土地の確認という形で行なわれた。

石斧採集地点（第1図参照）

①山頂の後述する玄武岩露頭の南方向に標高にして約2m下がった地点に完好の打製段階の石斧を採集した。この石斧は打製もかなり進んだ段階のもので、完形品である。

②熊野神社の西方、標高55~60mの地点で現在の山道面に、玄武岩小塊中に見出された。



第7図 黒褐色粘質土層（下層・遺物包含層）出土石器実測図

打製段階の未製品である。

③山麓では標高5～15mにかけて、特に今山の東南側から南にかけての地点に出土が著しい。東麓の標高10～15m付近に1個所（熊野神社東側参道の北）、南麓端の今回調査の第4遺跡のやゝ西北部の標高5～6m地点でもかって宅地造成の際かなりの石斧の出土をみた。中山平次郎の報告や今回の出土例にみる様に、この地域は多量にまとまって未製石斧が出土するので、山麓部は今後十分に注意する必要がある。山頂、山腹には一部打製段階のものも出土するがおゝかたの打製・蔽打段階の製作は、かって指摘され、また今回の調査結果が示すように

この山麓部で製作されたと考えられるので、今後もこの周辺に同様の遺跡の発見が予期される。製作工房址が出土するとすれば、山麓周辺に最も可能性がある。

露頭の調査（第2図参照）

今山は北と南に二つの山頂を有しているが、南の山頂、標高82m地点に玄武岩露頭が露出している。山頂は南北約10mの狭い平坦部でその中央に柱状節理をなした露頭が南北を長軸にして横たわっている。露頭の大きさは長絶4.5m、幅2m、厚さ2mをはかる。この露頭の周辺には解析された玄武岩小塊が密集している。この中より前述の打裂段階末盤石斧が出土し露頭の原材料利用の可能性を推測させるが、原材かきとり痕などは今のところ確認されていない。

分布状況を全般的に再度概観すると、今山北半分には今のところ石斧は全く出土していない。すでに今日宅地造成がなされ、かっての景觀はみるかげもないが、構成岩石を南山丘とは異にしている。製作地の中心部は今山の南半、山頂と南麓中央部および東南隅を結ぶ三角形の中に集中している。特に熊野神社とその東・南の二つの参道間、およびその周辺に限られて石斧の出土が多い。西麓部にも石斧が出土するという地元の人々の話もあり今回は確認できなかったが、更なる細密な調査を必要とする。

5. おわりに

今回の調査の重要な成果の一つは、今山石斧の製作が従来の知見より一段早い時期に始まっていることを把握したことである。昭和26~29年の板付遺跡の発掘調査で、今山産石斧が板付Ⅷ式土器に伴なって出土し^了、のことから今山遺跡での石斧製作と移出は、弥生中期の段階に行なわれていたことを推察したわけであるが^了、今回の調査によって、その製作の開始はさらに弥生時代前期終末期にまで古くすることができたのである。もちろんこの段階での石斧製作の目的は中期段階のいわば交換価値の追求とまではいかず、背後にひかえる糸島平野に在住するゆるい結合の地域的共同体での使用を主目的とした、使用価値の創造に石斧製作の力点がおかれていたことは想像にかたくないが、他方、その剩余生産物の一部は他地域共同体に交換物資として搬出されていたことも事実である。甘木市小田、小川遺跡において今山産と考えられる玄武岩石斧が長方形凹穴内より前期終末期の土器に共伴して出土している。肉眼的観察によれば材質、形態共に今山遺跡出土の石斧と酷似する。鉱物学的検討は今後に残されてはいるが、もしそうであればこの知見は弥生前期終末期に、今山産石斧が一定の地域と交換流通関係にあったことを物語るのである。これは同時に弥生前期終末期における分業生産の開始の問題を検討せることとなる。

かゝる事象が弥生時代前期終末期に與るのは直接的には新たな開拓、開拓に伴なう樹木の伐採に粗制用工具として多量の石斧を必要としたことに因るものであろう。糸島平野での具体的検討は今後に残されているが、これに隣接する早良平野やまた北部九州一般の傾向として、そ

これまでの遺跡の広がりが、点としての存在の側面を強く有しているのに対し、前期終末期を契機として単位地域（平野・盆地）のはゞ全面をおこう程に遺跡の空間的拡大をみせる。それまでの点あるいは線としての遺跡分布が面としての広がりをみせるようになり、これが石斧の多量の製作を促がす背景となるのである。

またこの時期は、上述の結果としてであろうが、一定の富の蓄積を示す朝鮮舶載の青銅器を所有するものゝ発生や、北九州独特の大型甕棺の出現があって、生産、商、観念の上に一つの画期を生みだしている。そしてこの画期には脱繩文を内容とする石器生産の社会的仕組みの変革も含んでいる。^⑤

今山遺跡の対岸にある今津遺跡は前期の玄武岩石斧製作場として本遺跡と並んで著名なものである。この両者の関係について、かつては民族の相違論として把握されたこともあったが、戦後の研究ではもっぱら時間差の問題として見え、二者における製作テクニックの相違を、合理性の問題に解釈の道を求めてきた。しかし今回の調査によって、この両者間にさほどの時間差がない可能性が強まってきたので、今津遺跡の中期消滅、今山遺跡の中期存続—繁栄のこの差は別の角度から再検討されなければならない。^⑥

中山博士の定式によって原材料採取と粗割は中腹、打裂・敲打・琢磨は山麓という二地点での製作法が報ぜられたのは昭和6年であるが^⑦、松本氏宅出土品や今回調査出土品を見ても、そのことは十分に今日でも首肯しうることである。

しかし一方山頂露頭の発見の同地点におけるかなり製作の進んだ打製段階未製品の出土、あるいは中腹における未製品（いづれも打製段階であるが）の出土はある時期又は製作者によつては、原材料採取地で打製段階まで工作を進ませていたことを想定させる。

（下條信行）

註①森貞次郎、岡崎敬「福岡県板付遺跡」『日本農耕文化の生成』所収 1961

②宝台遺跡調査団「宝台遺跡」 1970

福岡市上長尾宝台遺跡において、弥生中期中葉の堅穴住居址内より今山産の玄武岩石斧が出土し、この時期に各地に石斧が今山より搬出されていたことがわかる。

③昭和45～46年にかけて朝倉高校が調査したのも、亦生前期終末期ごろの堅穴床面より土器と併出して出土した。

④下條信行「亦生時代の早良平野」『宮の前遺跡A～D地点』所収 1971

⑤有名な飯城市立岩遺跡の石庵丁製作もこの時期を開始期としており、生産用具の製作においてもこの期が一つの画期であったことを物語っている。

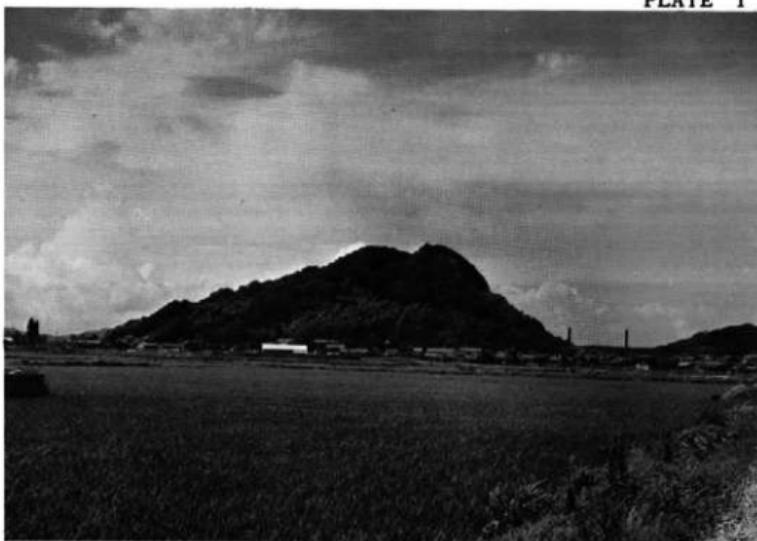
⑥中山平次郎「西系統亦生式民族の石斧製作法にあらわれたる民族性の相違」考古学雑誌
22-4

⑦藤田等「農業の開始と發展」『私たちの考古学』9 1956

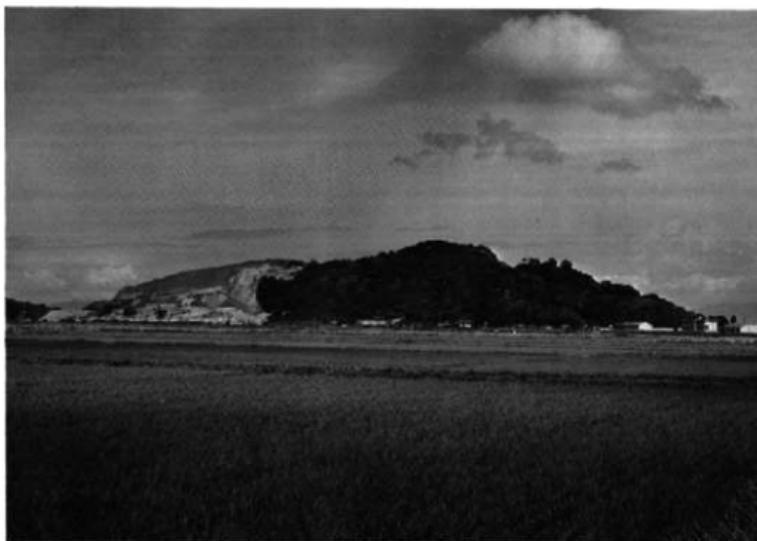
⑧筆者は粘土、志摩の有すヒンターランドの条件の差異に原因があるのではないかと考えて
いるが今後の検討を要す。

⑨中山平次郎「今山の石斧製造所址」『福岡県史跡名勝天然記念物調査報告』第6輯 1931

PLATE I

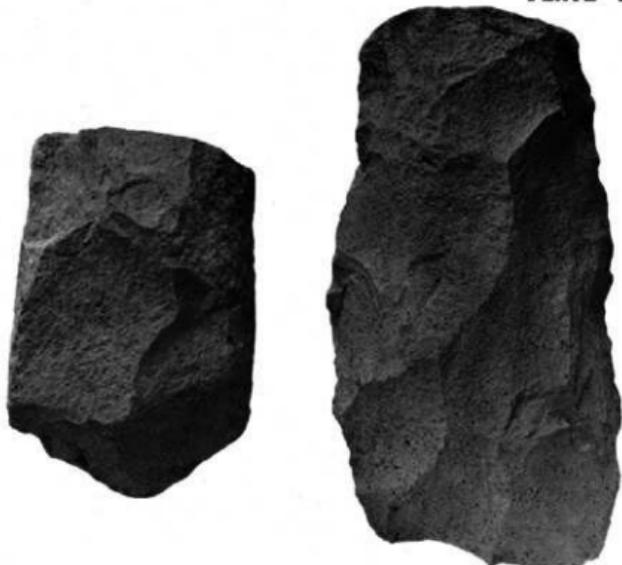


(1) 今山遠景（西南方向より）

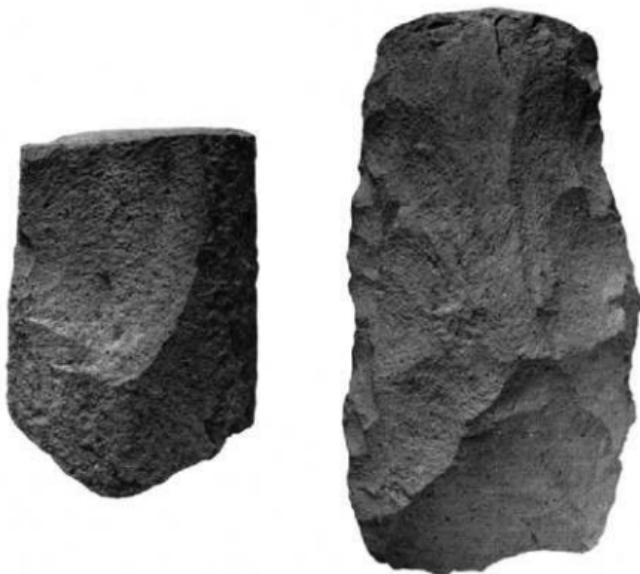


(2) 今山遠景（北側—写真左一は宅造により原形を消失）

PLATE II



(1) 黒褐色粘質土層出土玄武岩石斧（左は敲打、右は打製段階）



(2) 同上裏面

(1)

板付II式土器と未製石斧の共伴出土状態



(2) 新たに山頂で確認された玄武岩露頭



福岡市埋蔵文化財調査報告書 第22集

今山遺跡(1)

1973年1月31日

発行 福岡市教育委員会文化課

編集 福岡市立歴史資料館

印刷 株式会社 チューエフ